

バプテストにおける バルト神学の影響について

— 礼典を「 sacramental」に解釈し直す試み —¹

金丸英子

はじめに バルト神学とバプテスト

近年、ヨーロッパのバプテストたちの間では「礼典を sacramental に解釈する」というテーマに関心が寄せられている。背景には20世紀後半から顕著になったエキュメニズムに対するバプテストの貢献の模索がある。例えば、バプテスト世界同盟 (Baptist World Alliance) には神学と宣教に関する複数の委員会があり、その中の「バプテストの教理とキリスト教の一致委員会 (Baptist Doctrine and Christian Unity)」は、カトリック、ルーテル、メソジストと共に礼典理解に関する共同研究を行っている。「聖書的なバプテストマは信仰者の信仰告白に基づく浸礼である」と言うバプテストの強い主張が、幼児洗礼を容認する他教派とのエキュメニズムの障壁となってきたからである。このプロジェクトで中心的な役割を担っているバプテスト派の神学者のほとんどはバルト神学の研究者であるため、その方法論にバルト神学の影響があると思われる。

1. エキュメニズムに対するイギリス・バプテストの応答

ヨーロッパのキリスト教界でエキュメニズムの動きが顕著となるのは1930年代のことである。イギリス国内でも異なる教派と神学的な対話が行われ、教会

1 寺園喜基『カール・バルト〈教養学の世界〉出版記念シンポジウム (2023年9月16日、於西南学院) の発題に加筆したもの。

の本質について、信仰者のバプテスマと幼児洗礼について、バプテスマの意味とその形式について、教会の職制について、教会と国家の関係が主要なテーマとなった。その際、イギリスのバプテストたちは自らの神学的立場を吟味する必要に迫られ、エキュメニズムに対するバプテストの課題は、同時にバプテスト自身への課題ともなった。

イギリス・バプテストの重鎮オックスフォード大学リージェントパークカレッジのアーネスト・ペイン (Ernest A. Payne, 1902-1980) は、1930年代にイングランド国教会、スコットランド国教会、メソジスト教会という国内の主要教派がエキュメニズムに共鳴し、それに積極的に関わるために自らの神学的な立場を吟味し直そうとしているのを知った際、バプテストもまたこれを機に、自らの神学、特にバプテスマ理解をあらゆる方面から再吟味する必要を痛感した。その意気込みは1938年の次の決意に表れている。「私たちは、バプテストのバプテスマ理解の原点と特徴の吟味を、漏れることなく、徹底的して学的に行うべきである」。つまり、バプテストがバプテスマをどのように理解し、解釈するかは、バプテストの信仰理解、教会理解、自らのアイデンティティーを考えるにあたり、極めて重要なテーマとなることを暗示している。これについては、日本のバプテストの歴史にも似たようなことがあったと言える。南部バプテスト派宣教師の尽力により、1907年に開校した福岡神学校は、その後北部バプテストの神学校と合併し、合同神学校の日本バプテスト神学校となる。しかしそれから10年も経たないうちに南部バプテストの流れを汲む九州のバプテストはそこから撤退し、それが1916年に西南学院の創立につながる。その原因の一端は、バプテスマ理解に関する見解の相違にあった。

2. バプテストにおけるバルト神学の影響

バルト神学のバプテストに対する影響はイギリス・バプテストにとどまらない。筆者は1989年にアメリカ・ケンタッキー州のサザンバプテスト神学校に留学したが、キャンパス内のブックストアにずらりと並ぶバルトの著作を見ている。その神学校では、神学者のデイヴィッド・ミュラー (David Mueller, 1929-

2010)が1960年代にバルト神学を紹介して以来、学内ではバルト神学は市民権を得ていた。ミューラーは1960年代に客員研究員としてバーゼル大学でバルトの指導を直接受けた南部バプテストの神学者で、ドイツ滞在中にバルト神学の入門書を執筆し、1970年代にアメリカで出版(*Karl Barth: Makers of the Modern Theological Mind*)、版を重ねた。また、70年代から90年代の在職中、神学校の神学論集にバルト神学に関する論文を多く発表した。そのほかに、同校の神学者デール・ムーディー (Dale Moody, 1948-1984) もバルト神学を講じた。なみに、南部バプテストのファンダメンタリストもバルトに親近感を持ち、穏健主義者駆逐のためにバルト神学を援用した。

イギリス・バプテストのバルト神学への関心は、第二次世界大戦後に顕著となる。もっともそれ以前から、ヨーロッパにおける幼児洗礼に関する議論は認識していた。1938年に始まるエミール・ブルンナーの論争、それに続く1943年のバルトによる論争などはイギリス・バプテストの間で共有された。先ほど紹介したペインは、この論争の常連であった。イギリス・バプテストにとって、洗礼論は常に主要な関心事であったので、バルトの幼児洗礼反対は研究者に学的興味を呼び起こしたのである。その主な理由はまず、教会における礼典としてのバプテスマの重要性を主張したこと、率直な幼児洗礼反対の表明であった。とりわけ、バルトによる神の業としての聖霊のバプテスマと祈りと従順における人間の業としての水のバプテスマの区別は研究者に刺激を与えた。

ペインは、1943年にバルトがスイスのグヴァットで行なった講演で、直ちに「神学研究推書」の1冊として出版された論文(英語タイトルは「*The Teaching of the Church Regarding Baptism*」)を英訳し、イギリス・バプテストに紹介した。ペインは友人からこの論文を紹介され、「バプテストのバプテスマの教理とその執行について傾聴すべき事柄を多く含んでいる」と評価して、いち早く英語翻訳に着手した。スイス改革派教会の神学者であり牧師であったバルトが、自身の神学的伝統であるカルヴァンが強く支持し、それによって再洗礼派の迫害を惹き起こした幼児洗礼容認を批判し、否定した事にバプテストは大いに励まされたのである。確かにバプテストはバルトの幼児洗礼否定に励まされはしたが、バルトが幼児洗礼を否定しながら教会の礼典としての幼児洗礼を肯定的に

受け止め、再洗礼を認めなかったのに対し、バプテストは幼児洗礼と教会の礼典としての幼児洗礼の両方を否定し、信仰者の信仰告白に基づく再洗礼の必要を主張して、バルトと相容れない点を認識した。

バルトは1965年、79歳の時に幼児洗礼否定に関する講演を行うが、参加者のひとりが、「そこまで幼児洗礼を否定するなら、なぜ再び洗礼を受ける勇気を持たなかったのか」との感想をバルトに個人的に宛てた。講演会の主催者（Geoffrey W. Bromiley）がバルトにそれを伝えると、バルトはその質問者に次のような返事を書いたと言われている。

79年前、私は、3世紀、あるいは4世紀以降の大勢のキリスト者に倣って幼児洗礼を受けました。これは教会が経験している多くの混乱の1つではあります。私もこれに反対してきました。だからと言って、その中で行われたそのバプテスマが有効ではないと主張したことは一度たりともありません。私はバプテスマの時、自分の言い分を求められず、またその機会を与えられなかったのは残念なことでした。しかし、私が聞く必要のあったことは語られました。ゆえに、最初のバプテスマを否定して2度目のバプテスマを受ける必要を見ないので、私は私が受けたバプテスマが正しく、重要であるという考えは変わりません。私は私が受けた1度のバプテスマをとて真剣なものとして受け取っています。これが将来、教会の混乱を鎮める呼びかけとなるでしょう²。

自分の洗礼は自発的なものでなかったと言う点では「混乱した」または「整えられていない」洗礼ではあったが、だからと言ってそれが「誤り」だとは思わない。よって再バプテスマの必要はないと言っている。

1943年にスイスで行われた「*The Teaching of the Church Regarding Baptism*」の講演のポイントはバプテスマの非 sacrament 化で、アメリカ人のバルト研究者 Travis McMacken は、エーベルハルト・ユンゲルがこの講演に基づいてバルトの洗礼論を5つの要点にまとめたと述べる。それによれば、バルトは、受領

2 Barth, Karl, *Karl Barth Letters, 1961-1968*, Trans. Geoffrey Williams Bromiley, Grand Rapids: Eerdmans, 1981, p.189. なお、文中で日本語に訳されている諸資料は、筆者の試訳である。

する側の自覚的なイエス・キリストへの信頼と応答のないバプテスマ、すなわちイエス・キリストに対する応答としての信仰者の告白がないところで授けられるバプテスマは「十分な」バプテスマとは言えないと述べて、バプテスマのバプテスマ理解に共鳴したと言う³。

3. バプテスマのバプテスマの「サクラメンタル」な再解釈の試み

しかし、バプテスマの真の主体は「自覚的な信仰告白を行う人間」ではなくイエス・キリストご自身であるため、「不十分な洗礼」としての幼児洗礼においてもこの真理は変わることがない。よって、幼児洗礼以外のバプテスマを再度受ける必要を見ないと考えた、とまとめた。そこでは「バプテスマの1回性」が強調されるが、それについてはバプテスマも同様である。ただバプテスマが幼児洗礼そのものを否定し「再バプテスマ」を行ったのは、イエス・キリストに対する信仰者の告白と恵みへの応答、イエスの弟子として新しい人間と作り変えられ、イエス・キリストの証人として生きるという人間側の倫理的決断がないバプテスマを、自らの聖書解釈から「正しい」としなかったためである。そこから、幼児洗礼を聖書が教える「洗礼」と見なさなかった。これは、バプテスマにとっては「バプテスマを受けていない」ことと同じであるため、現象的には2度目のバプテスマ（バプテスマが誕生した当時は、全員が幼児洗礼を受けている）であっても、内容的には「初めての」バプテスマであると理解し、「信仰告白に基づく信仰者のバプテスマ」を譲らなかつた。

そのような伝統を背負っているヨーロッパのバプテスマ研究者はバプテスマの礼典理解をサクラメンタルに再解釈しようとしてきた。バプテスマを「単なる」形式や象徴に留め置くことなく、バプテスマという人間の行為が、聖霊の働きとそれに対する人間の応答であるので、それを活ける神との出会いである「サクラメンタルな出来事」と考える。

注意を要するのは、この場合の「サクラメンタル」がカトリックに代表され

3 W. Travis McMaken, *The Sign of the Gospel: Toward an Evangelical Doctrine of Infant Baptism after Karl Barth*, Minneapolis, MN: Fortress Press, 2013.

る「礼典の儀式そのものが神の恵みを伝達する」という「事功説」的な立場とは異なる点である。不可視的なもの（spirit）と可視的なもの（matter）の関係を切り離し、両者の間に優劣をつける傾向のある近代的な思考の枠組から抜け出て、可視的な事柄の中に聖霊なる神の自由な活動があり、可視的な事柄を通して人間に出会いたもう神がおられるという信仰的な事実を「サクラメンタル」と言っているように思われる。これを洗礼論に当てはめると、バルトは「水のバプテスマは人間の応答の行為、それに先行するのは聖霊のバプテスマ」との説明から、一步前に歩み出ようとするバプテストの試みのようにも思える。もっとも、これもまた慎重を期すべきで、一步間違うとエクス・オペレ・オペラート（Ex opere operato, 事効説）に逸脱する危険性は否めない。

バプテストには、ややもすれば人間側の応答を求めすぎるあまり、祈り、説教、礼典、牧会と言う、信仰において紡ぎ出される事柄から、神秘性、精神性を削ぎ落とさんばかりのバプテスト・アクティヴィズムとその弊害が存在している。その傾向を危惧する者たちにとっては、「バプテスマをサクラメンタルに再解釈する」試みは、人間の行為に臨み・人間の行為に出会い、そこで人間と共に自らの創造の働きを為そうとする聖霊なる神とその現臨への信仰的な認識を取り戻そうとする神学的な挑戦になると思う。言うまでもないが、「バプテスマのサクラメンタルな再解釈の試み」は、バプテストに形式主義や「神人協働説」を持ちもこうとする企てではない。オックスフォード大学のバプテスト神学者ポール・フィデス（Paul Fiddes）はこれを「神にある参与（Participating in God）」と呼び、バプテスマは、人間を神ご自身の躍動的な動きの中へと導き・それへと押し出し・人間と共に創造の御業を神のダイナミズムであり、それは恵みと喜び、神の前の人間の従順であると述べる。バプテストは時として、「信徒の教会」を自負するあまり、「人の声」を聖書よりも、人の思いを神の思いよりも優位に置いてしまう傾向や、「礼典は単なる形式」「単なる印」とばかりに、語られる言葉としての説教は礼拝の中心に据えても、礼典の執行は軽んじる傾向がない。そのようなバプテストへの戒めでもあろう。

このように、イギリス・バプテストの研究者の間では、幼児洗礼否定のバルト神学の見解は広く受容され、自らのバプテスマ理解の神学的根拠となって今

日まで影響を与え続けているが、注目すべき点は、同様の影響をバプテストの聖書学者も否定し難い貢献をしているという事実である。1962年、イギリス・バプテストの新約聖書学者 G.R. ビューズリー＝マリー (G.R. Beasley-Murry, 1916-2000) は *Baptism in the New Testament* を出版し、バプテストのバプテスマ理解の新約聖書の根拠を論じた。これは古典的な文献で、初版から半世紀以上も版を重ねている。ビューズリー＝マリーはその後、1966年に *Baptists and the Baptism of Other Churches* を発表し、その中で次のように述べる。

バプテスト教会のバプテスマは、信仰者の信仰告白に基づくものでなければならない。これは基本である。その際、教派の違い、様式の違いは二義的である。次に、幼児洗礼を受けている者がバプテスト教会に転入する場合、他のバプテスト教会からの転入と同様に、信仰告白のみが求められるのであり、浸礼による再洗礼は施さない。最後に、幼児洗礼を受けている者が、その教会で自らの信仰告白を行なっておらず (堅信礼)、よって正式な教会員でない場合、バプテスト教会への入会は他の決心者同様に信仰告白に基づくバプテスマを求める。

以上から、イギリス・バプテストのバプテスマに関する神学的な議論は、神学者のバルトと聖書学者のビューズリー＝マリーによる貢献によって発展し、充実してきたと言える。そのような学的伝統に立って、近年のバプテストの学者たちは「バプテストのバプテスマ理解に関する再吟味」という挑戦に踏み出す勇気を得ている。これは、それまでの議論が、バプテスマの形式とバプテスマの受領者の資質に集中していたのを、バプテストのバプテスマに関する神学そのものと、その神学の教会形成と牧会における「受肉のあり方」と議論をシフトさせたということでもある。

4. 継続するバルト神学との対話

「バプテストの礼典をサクラメンタルに解釈する」試み、「バプテストのバプテスマ理解を再度問い直す」研究者の神学的な営みは現在進行中で、それに

ついて解説は筆者の力を超えている。しかしながら、バプテストは、幼児洗礼を否定したバルト神学から刺激と励ましを受けたこと。その上で批判的にバルト神学に取り組み、自らの存在のユニークネスに関わる「バプテストの信仰と教会にとって、バプテストとは何か、礼典とは何か」を鋭意問い直そうと取り組んでいる事実、これまで「他教派との相違点」を際立たせることで発信してきた自らの立場から、「他教派との共通点」を再発見し、「見えない教会」としての「公同教会」の一部として、エキュメニカルな世界に自らを開く神学的な模索に励んでいることは記したい⁴。換言すれば、今日のバプテストの研究者は、バルトの洗礼理解に学び、それに触発されながらバプテストの先達の信仰理解に再度目を向け、「バプテストとは誰か」を再確認し、異なる他者に自らを開きながら、しかし「自分」を失うことなく、いかにして復活の主に向かって共に賛美の声を上げられるか。そのためにバルト神学と格闘しているように思う。

最後にバルトの「*Church and Churches*」の1節を記す。

教会の統一の探求は、実際のところ、教会の揺らぐことのない頭であり主であるイエス・キリストを探求することと同じである。統一がもたらす祝福は、祝福を与える神と無関係ではない。神にその根拠と現実があるのであり、神の言葉と霊を通してそれは我らに啓示される。それは神における信仰においてのみ我々の間で、現実となるからである。

(Barth, *Church and Churches*, p10)

これに呼応するように、バプテストの先達は他者に対する自らの立ち方を次のように告白している。

4 好例は、欧米のバプテスト派研究者の共同執筆による *Seeds of the Church. Towards An Ecumenical Baptist Ecclesiology* (Cascade Books, 2022) である。寄稿者の Steve R. Harmon, Elizabeth Newman らアメリカのバプテスト派研究者でバルト神学の研究者でもある。

わたしたちは一部を知っているに過ぎず、多くのことを知らないので、ぜひそれを知りたいと告白する。私たちが知らないことを神の言から好意をもって教えてくださる方がいれば、わたしたちは神とその人々に感謝する。(ロンドン信仰告白, 結語)